

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2013.03) 平成23年度:80.

余命半年と告知され4年間にわたり化学療法を継続している患者が抱く思い

五十嵐悠、畠山沙織、村山直也、瀬川澄子

# 余命半年と告知され4年間にわたり化学療法を継続している患者が抱く思い

6階西ナーステーション ○五十嵐 悠、畠山 沙織、村山 直也、瀬川 澄子

大腸がんで余命半年と告知後、再発による手術と化学療法を繰り返す患者が、治療の中で抱いた思いを明らかにし、その人らしく生きることの意味を探求することを目的とした。

## I. 研究方法

S 状結腸癌多発肝転移にて余命半年と告知され手術後、4年に亘り化学療法を継続している男性患者1名を対象に、治療の中で抱いた思いについて半構成的面接を行い録音した。意味・類似性に従い、一文一意味をコード化しカテゴリー化した。倫理的配慮としてプライバシー保護・研究趣旨を説明し、文面で同意を得た。

## II. 結果

がん告知から現在に至るまでの思いについて分析した結果、68のコードと17のサブカテゴリー、3つのカテゴリーが抽出された。以下、【】をカテゴリー、《》をサブカテゴリー、「」をコードとして示す。告知後は《命に限られたことに対する予期的な不安》を感じ「精神状態が真っ暗」な中で《家族・友人の言葉が希望の光》となり《不安が感謝に変化》した。《父親役割遂行への思いと葛藤》や《社会的役割遂行への葛藤》を抱え、その中で《生きてきた軌跡を確認》し「余命半年が過ぎ、後は神様からもらったものだから楽しもうと思った」と《余生を大切にしようという思い》や「いつ死んでもおかしくないのに、今迄元気にいさせてもらえて自分にとっては奇跡」と《生に対する感謝の気持ち》を表現していた。治療を続ける中で「友達や家族の愛情をととても感じる。病

気になってよかった」と《人とのつながりを大切にする思い》や《家族・友人の絆を再確認》し、「病気になったから、気づかなかつたいろんなことを教えてくれ楽しい」と《病気になったことで気づいた感謝の気持ち》を語り【死と向きあい葛藤と謝意が交錯する中で生きる】ようになっていた。

「僕は化学療法しかない」「がんは治るわけではないから抗がん剤で維持してくれればいい」と《限られた治療法にける思い》を持ち、「化学療法で一番いい病院を探してくれた」と《友人の紹介で得た縁》で治療を継続していた。「治療をやり続けることが辛かった」と《生きるために治療を余儀なくされている辛さ》を感じ「短くても楽しい方がいい」と《人生の長さよりもQOLが大切》と感じていた。治療を継続する中で「代謝をよくすること」と《副作用への対処行動を獲得》し、【QOLを大切に治療に挑み続ける】ようになっていた。

氏には《最善観・諦念という信念・信条》があり、「僕だけが悲観される状況じゃない」と考えていた。過去の治療について「やらないで悩むよりもやってみてから考えた方がいい」と【信念・信条に基づき自分の生き方を肯定する】ようになっていた。

## III. 考察

A氏は余命半年と告知され、死と向きあい不安や葛藤、周囲に対する感謝の気持ちを持ち、自分らしく生きるために対処行動を獲得しながら治療に挑み、自分の信念・信条を強みとし、自己の生き方の肯定へとつなげていたと考える。